
言葉にまぎれたうやむや世界。

ランタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

言葉にまぎれたうやむや世界。

【Nコード】

N9213A

【作者名】

ランタン

【あらすじ】

一人の少女が学校で『消えた』
……その奥に隠された真実は、
あまりにも哀しいものだった。

ブログ 夜の学校の静寂（前書き）

ためすぎだろ！という文句があつたらすいません。

今度こそは続けようかと…… 思います。

まだまだ至らない点も多々あると思いますが、よろしく願います。

ブローグ 夜の学校の静寂

「……やっと、見つけた……」

夜の学校。

暗闇に満ちた場所に、少女が立っていた。

少女の手は血まみれだったが、全く痛そうなんかんじはない。

その表情はとても暗く、また同時に明るい印象も与える。

「……やっと……」

顔はげっそりと苦勞の表情があっただけで、その中には歡喜の表情もあつた。

そして、静かに少女は歩き出す。

夜の学校の闇に向かって……

第一話 生徒会室の静寂

静寂に包まれた生徒会室には、一人の女が座っていた。

制服にはところどころにほつれがあったり、スカートも短くて、いかにも問題児という風貌だ。

段カットの髪の毛は恥じることなく堂々としていて、彼女が普段どんな人物であるかを思わせる。

「遠藤、いるんだったらさっさと出てきなさいよ」

彼女の気迫におされてか、ドアの影から男が出てきた。

「……すっかり生徒会室を乗っ取りやがって。副会長は俺だって言うのに」

私立清和学園生徒会副会長・遠藤達也はふてくされながら言った。

「何いってんの。さっさと報告してよね」

偉そうに文句をいう女子高生・進藤由香は眉をひそめた。

達也は静かに、透き通った声で手に持った紙を読み上げる。

「海藤成実は中学三年生。彼女は友人に評判の『占い師』だったらしい」

「占い師？」

由香が怪訝そうに聞いた。

「……今日の運勢とか。まあ、テレビの占いとそう変わらない」
「それで？」

達也は少し信じられないように言った。

「一度も外れる事は無かったらしい……」

由香が頷く。

「わかった。急いで私は彼女の行方を追うわ。……たく、なんで他の人の運勢占えて自分の運勢わからないんだろっねえ」
ブツブツ皮肉をいいながら、由香は生徒会室を出る。
すかさず達也は聞いた。

「代金は？」

「急いでるから、後」

達也はもう誰もいない生徒会室でため息をつく。

「そんなこと言って、もう10回分滞納してるくせに……」

第二話 携帯電話の静寂

この学校には、『守護者』がいる。

生徒の行動を監視し、同時に生徒を護り、生徒の害になるものを排除する組織だ。

しかし、そんな集団が白昼堂々学校にいるわけにもいかないのです。その代表として進藤由香が達也に情報を求めに毎日生徒会室に来ている。

達也としては、そんな集団に関わりたくは無かったし、興味も無かった。

だけど、由香にはもう『契約』を交わしてしまっているので、情報を公開する義務がある。

仕方ないが、そうするほかないのだ。

だが、達也だって生徒の情報を無料で教えるわけにはいかない。なんと言ったって生徒会副会長の責任がある。

そういうわけで、毎回由香から代金を頂戴しているわけだ。

そして由香にもう10回分滞納されるという最悪の結末。

ああ、乙葉がもう少しまともに仕事をしてくれればいいのに。

乙葉は私立清和学園の生徒会長だ。

しかし、当選しても全く仕事をせず、注意しようと思ってもいつも教室にはいない。

周りの人間はそろってどこに行ったか聞いても、「知らない」「あまり授業にこない」と口をそろえた。

乙葉の彼女の垣藤夏美も、全く知らないそうだ。

乙葉は全く仕事をしないし、そのうえ由香の件もあるし……
もうそろそろ達也は倒れそうだった。

ピッピッピ……

達也は由香を追って学園を抜け出てきたので、一応乙葉にも電話をしようと携帯電話で乙葉に連絡を取る。

「もしもし？ 乙葉？」

すると、一拍遅れて声がした。

「あ……達也か？ どした？」

「今ちよつと進藤と海藤成実を探してる。今日の生徒会は出れそうに無いから……」

言い終わる前に、乙葉は大声で言う。

「つやめろ！ 海藤成実の件は危険だ。今すぐ手を引いた方がいい」
乙葉が大声で怒鳴るのは初めてのことだったので、達也は驚く。
いや、もっと驚いたのは海藤成実のことを乙葉が知っていたことだ。

乙葉にはそのことを話した覚えはない。

「乙葉……？」

気が付くと、電話は切れていた。

第三話 街頭の静寂

「……」

達也が黙って携帯電話の画面を見てみると、由香がイライラしたように覗き込んだ。

「ちよつと、海藤成実について少し分かったから……ん？」

「あつちよつと……これはその……」

あたふたと言いつくを考えている達也をじろじろ疑わしげに見ながら、由香は言い放つ。

「今更他の人に連絡して私をどうにかしようなんて考えない方がいいわよ」

どうやら、2人の思考は完全にずれていたらしい。

「違つて。あ、それより乙葉にこのこと教えた？」

すると、由香は軽蔑するように達也を睨んだ。

「何言つてんの？ 今さっき私は情報聞いたばかりなんだけど、
そういえばそうだった。」

「じゃあ……なんで乙葉が知ってるんだ？」

「知らないわよ。それより、海藤成実のことで分かった事があるのよ」

由香は急いで携帯電話を取り出した。

どうやら、達也が乙葉と喋っていた間、由香も誰かと喋っていたらしい。

「……あ、もしも？ さっきの件についてなんだけど。うん。それそれ。……あーうん」

電話の相手と喋りながら、由香はサラサラとシャーペンでメモに走り書きをする。

「……んじやばいばい。ありがとう」

「何？ 何がわかったんだ？」

達也が少し怒ったように言っと、由香は言った。

「海藤成実のこと。このごろは、よく街をふらついてたらしいわ。それだけじゃなくて、少し妙な事も分かってきてるの」

由香は、眉根を寄せて考え込んだ。

「妙な事？」

「海藤成実は、何かを企んでたらしいの」

第四話 再び・生徒会室の静寂

「企んでた？」

達也が訳がわからないというように呟いた。

「……様子が変わったらしいの。心配して声をかけてみたら、変な事をばやいてみたい」

「変な事？」

由香は訝しげに言った。

「『あの計画は私にしかできない』」

達也は、それを聞いた瞬間、冷や汗をかいた。

きつと行方不明になったその日、海藤成実は何にかを実行しようとした……

そうになると、失敗した可能性が高い。

しかし、今のところ変死体とかの遺体は見つかっていないし、そういう情報もない。

「とにかく、もうちょっと情報を洗い出さないと海藤成実を追えないわ」

由香は目を細めて、覚悟を決めたように言う。

「遠藤はちよつと学園に戻って情報を探して。いい？ 誰に邪魔されようと絶対何か見つけて」

「……わかった。んで、進藤はどうするんだ？」

すると、由香はさらりと言った。

「もうちよつと情報を探してみる。絶対にこれは何かあるわ」

そうして、由香と達也は急いで自分の仕事にとりかかった。

「……やっぱり、この方法しかないな……」

誰もいないはずの生徒会室には、生徒会長・真藤乙葉が本をパラパラめくっていた。

そして、乙葉は何の感情もない顔に、少し不安をにじませている。

「お互い、命をかけた戦いだからな、達也には悪いがしょうがない……」

乙葉はそう呟いてから、何事もなかったかのようにまた単調な作業を繰り返す。

それは誰も知らない、乙葉の『覚悟』だった。

第五話 図書室の静寂

とりあえず学校に戻った達也は、図書室に向かった。

まずは洗いざらいなんでもいいから海藤成実のことを調べると言われたからだ。

「海藤成実の貸し出し履歴は……と」

司書さんにも許可をもらって、パソコンで調べてみると、なんとも不可思議な書物が出てくる。

『『清和学園の歴史』『清和学園歴代校長』『私立学園の七不思議』『清和学園のミステリー』……』

そんな本がこの図書室にあったことだけでも十分驚愕の事実なのに、それを借りていた女生徒が行方不明というのも無視できない事実だ。

「……」

とりあえず、由香に連絡したほうがいいかもしれない。

そう思った達也は、とりあえず携帯電話を手にとって、由香に電話をかける。

「あ、もしもし？」

「進藤か？ 今ちよつと学校の図書室にんだけど、それが……」
そして、達也は全てを由香に話す。ただ、真実をそのまま。
由香も、何も言わずにただ黙って聞いていた。

「……うん。まあそんなところだろうと思ったわ」

思いがけない由香の言葉に、達也は驚く。

「何か、わかったのか？」

「うん。こつちでもね、大体調べがついてきたの。というか、今海藤成実の家にいるわ」

さらりと当然のことのように言う由香に、達也は内心あせった。
「え、それって不法侵入じゃ……」

「大丈夫よ。こっちだって馬鹿じゃない。だてに守護者やってるわけじゃないんだから」

達也がそんなことを言うとは心外だ、と言うように由香は自信たっぷりに言う。

「ふん、それで、なんか見つかったのか？」

「ええ。今あんたが言った本みたいなのがこっちに大量にあるわ」
由香は、少し声をひそめた。

「海藤成実の部屋の本棚に、びっしり本が並んでる」

第六話 海藤成実家の静寂

「本？」

達也が聞き返すと、由香はさらに声をひそめる。

「うん、それが統一された本じゃないの。今あんたが言ったように歴代の校長の写真とか、学校の歴史とか、迷信の本とか……さっぱりわからないわ」

「……わかった。じゃあちよつとその本持ってきてくれ。今すぐそっちに行くから」

由香は達也に海藤成実の家への道を説明して、電話を切った。

達也の頭の中は、ただ海藤成実で埋まっていた。

副会長として、と言うのとは少し違う。そういうのじゃなくて、ただ、なぜ海藤成実が行方不明になる必要があつたのか、今彼女が何をしているのが気になったのだ。

要するに、個人的にそれを知りたいだけ。

「ほら、これにこれとか、これも」

海藤成実の家に来ると、いきなり由香が何冊かの本をどさっと出してくる。

「……こんな大量に、本が？」

それ自体不気味だな、と思いながらも達也はパラパラと本をめくる。

すると、不思議なことが書いてあった。

『汝、汝は生きるものであり、同時に死すものである』

その本には、他のページは普通の雑誌と変わらないのに、そこだけ何百年何千年と年代を過ごしてきたかのように黄ばんでぐしゃぐ

しやになっていた。

「なあ進藤、これ……」
その時。

ピリリリ……

携帯の着信音がなって、達也はすぐに出る。
「もしもし？」

そうすると、乙葉の声が途切れ途切れに聞こえた。

「達……也。急いで……学校に来い……」

「乙葉か？ どうしたんだよ」

ブツッ

達也の顔色を見て、由香がすぐさま聞く。
「会長が、どうしたって？」

正直、達也にもわからなかった。

第七話 再び・夜の学校の静寂

携帯電話を閉じてから、しばらく達也も由香も何も言えなかった。

「とりあえず、急ぐわよ」

由香はあわただしく準備をして、達也を急かす。

「あ、ああ……」

でも、達也はあまりぴんとこなかった。

あの声の途切れ方は、電波の途切れたかんじとは少し違うような気がしたからだ。

なんていうか、上手く説明できないけれど、まるで……

「っ!？」

その答えにたどり着いた途端、達也はぎくりとする。

「進藤、ちよつと俺先に行つとく! 説明は後でするから!」

「ちよつと……」

由香が止めるのも無視して、達也は走り出す。

何も考える余裕がなかった。もはや一刻の猶予も許されない。

雨の中、達也は学校に着いた。

自慢の黒髪も、イニシャルが書いてあるＴシャツも、ずぶぬれになっちゃったけれど構わない。

校門は閉まっていたけれど、とりあえずよじのぼる。

「乙葉! 乙葉っ」

夜の学校は、酷く昼間とは別のものに見える。見える景色に、拒否されているように感じる。

「達……也……」

か細い声が、近くでする。

「乙葉か!？」

声のする方向に、達也が目を向けると、そこには考えても見なかった光景が映った。

乙葉の頭から、目から、足から、とめどなく血があふれて、顔面蒼白だった。

しかし、乙葉は止まることなく、ただ血がついた指で円陣を描く。そして、乙葉は立ち尽くす達也に、たった一言、告げた。

「海藤成実を、殺せ」

それが乙葉の最期の言葉だった。

それきり乙葉は、二度と目を開けることはなかった……

第八話 乙葉の静寂

乙葉が死んで、ずるりと崩れ落ちていくのを、達也はただ見ていた。

「遠藤？ どうした……」

声をかけてきた由香も、乙葉のそれをみて、言葉をなくす。二人はただ、動かない乙葉を見るしかなかった。

しかし、由香はすぐに達也に囁く。

「……今大切なのは会長のことじゃなくて、海藤成実のことでしょう？」

それは、乙葉を今は忘れろと言う残酷な意味を含んでいた。

「……」

達也は、無表情に乙葉を見る。

さっきまで喋っていたはずのその口は、閉じたままで動かない。死んだのだ。

昨日まで、今まで、ずっと隣にいたはずの乙葉が、あまりにもあつけなく死んでしまった。

達也はただその現実を、冷たく受けとめる。

由香の言う通り、乙葉のために今できることはそれしかない。

『海藤成実を、殺せ』

乙葉が達也に命令したのは、あれが初めてで最後だ。だから、達也に乙葉は託したのだ。ただ1つの現実と自分を。

「わかった」

決意は固まった。

もうやるしかないのだ。海藤成実を追って、殺すしか。

残酷だとは思わない。乙葉が死んだ以上、それ以上の訳などいない。

学校の校舎には、静寂がたちこめていた。

そして、その中心に海藤成実はいた。

「遠藤先輩。どうかしましたか？」

まるで何も起こっていないと言うような口ぶりに、達也は一瞬動揺する。

「……ちがう。ただ、乙葉のことを聞きに来ただけだ」とすると、海藤成実はさりと云った。

「ああ、生徒会長ね。あの人はなかなか勘が鋭くて苦労したわ。だから、仕方なくそうしたの」

当たり前の事のように言う海藤成実に、達也はもう何も感じない。怒りも、哀しみも、何も。

「……勘が鋭い、っていうのは？」

「あの人はもともと私の計画を知ってたみたいね。まあ、阻止されるのは嫌だったから。遠藤先輩にはわかるんじゃないですか？ 会長はいつも教室にいなかったこと……」

その瞬間、達也はやつと気づいた。

乙葉は、授業をさぼったわけでも、なんでもない。

海藤成実を追っていたのだ。

第八話 乙葉の静寂（後書き）

いつもご愛読ありがとうございます。
今後もしよろしくお願いします。感想とかくださったら泣いて喜びます（笑）

第九話 隠された部屋の静寂

「……じゃあ、おまえは……」

達也は次の言葉をやつのことで飲み込んだ。

目の前にいる海藤成実は、動じることは一切なく、ただ目を細めて状況を観察していた。

「先輩には悪いけど、私はもう後戻りはできない。だから……」

海藤成実は静かに、錆びたナイフを取り出す。

「死んでもらいます」

自分が死ぬ事にどうとも思わない。

でも、まだ駄目だ。ゆずれないものがある。

「……終われるかよっ」

乙葉は死んだ。だけど、自分は生きている。

まだあきらめられないのだ。自分が何かできると思いたかった。

錆びたナイフが、達也の頬をかすめる。

鮮やかな赤い血がすう、と流れ落ちた。

「わかりました。先輩も、一緒に来て見てください。私の計画を……」

正気を失ったようなギラギラした目で、海藤成実達は達也を睨む。

そのやり取りを見ながら、由香はぼつりと呟く。

「人を殺してまで、達成しなければいけない計画なんてあると思ってるの？」

しかし、誰も反応しなかった。

達也は、今何より乙葉の死を肯定されるのが怖かったからだ。由香の言葉を自然に受け流すほかできない。

コッ、コッ……

学校の校舎の方に向かって、海藤成実は歩いていく。

すると、昼間の学校にはなかったはずの扉に行き着いた。

「ここは……？」

達也と由香の疑問を見て取ったように、海藤成実はさざりと言う。
「私が作ったんです。下手に見られないようにいろいろ細工しました。どうぞ」

そう言われて、二人が中に入ると、中にはおぞましい光景が広がっていた。

第十話 再び・隠された部屋の静寂

そこには、中身が抜けたように動かない人体がたくさんあった。

「……これは……」

ぞつとする光景の中で、由香も達也も立ちすくむ。

「ああ、これは人間の抜け殻みたいなものです」

その中には、昼間海藤成実の家で見つけた、校長の本に載っていた歴代校長の肖像画にそっくりな人たちがいた。

「まさか、おまえは……校長を？」

「殺してはいないわ。ただ、体をこっちに持ってきただけ」

校長たちは本当に人形のように動かず、海藤成実も動かない事をわかっているようにただ頷いている。

達也は、目の前に散乱している校長の体を、持ち上げてみた。すると、恐ろしく軽くて、身震いした。

みんな、死んでいるはずなのだ。生きているはずがない。なのに……まるで生きているような感触がして、鳥肌が立つ。

すると、今まで状況を見ていただけだった由香が、達也にぼそぼそと話した。

「遠藤、海藤成実は今精神状態が普通じゃないから、話をともに受け入れない方がいいわ。こっちも早いところ誰か呼んどかないと」
冷静に言っただけだが、由香の顔には、冷や汗がたらたらと流れている。

どうやら、状況は相当悪いようだ。『守護者』の目からしたら、このような異常な部屋が学校に存在している事自体危ない事なのだろう。

「いい？ 海藤成実があつちの校長たちに気を取られている間に私が連絡取ってみるから、遠藤はあいつを見張つていて。……あと、最悪の事態も考えなくてよ」

由香が達也にそんなことを言ったのは初めてだった。
達也は、由香と目を合わせないようにして、ゆっくりと頷いた。

第十話 再び・隠された部屋の静寂（後書き）

祝・十話ですね！『コーズ』以来です。

これからも突っ走っていきたいです！よろしくお願いします。

第十一話 海藤成実との静寂

由香も乙葉も、今初めて達也に言うのだった。

前々から言って欲しかった事を、今言われるのはやはり、辛いものがある。

「……離れるのか？」

いつかは、全てが消えてしまうときが来るのだろうか。その時には、全て洗い流せられるのだろうか。

乙葉の死も、海藤成実の企みも、由香の頼みも、そして、自分の決断さえ。

由香が携帯で『守護者』の他の員を呼ぶ間、達也は海藤成実を見張っていたが、特に新しい動きはしていなかった。ただ、校長達の動かない人体を興味深げに、そして哀しげに見つめていた。

「あなたは、何をしたいんですか」

まっすぐに海藤成実を見据え、達也は問う。

知りたかった。乙葉を殺してまで、こんな奇怪な部屋を作ったで、達成しなければならぬその『目的』が。

「『何がしたい』ねえ……じゃあ、先輩は、この校長達をどう思います？」

哀しげな瞳が、達也に向けられた。

「もう、校長達のここでの使命は終わった。もう死んだんだ。乙葉と同じだ。生き返らない……」

そうだ。この校長達はもう死んでいて、乙葉も死んでいる。

死んだんだ。生き返らないんだ。泣いたって喚いたって怒鳴ったって、何したって帰ってはこない。

「私も、そう思います。だけど、この人たちは生き返ります」

無垢な瞳。決して嘘を言っているようには見えなかった。

「……うん、そう」

目の前にいる少女は、人を殺してまで、自分をぼろぼろに
してま
で、それを信じて、ずっと実行しようとしていたのだ。

達也にとっては、仇でしかない後輩の海藤成実だけれど、それは
避けられない事……この計画は、即座に止めなければいけない。

それは乙葉から託された役目で、同時に達也の最大の葛藤だった。

第十二話 象徴の静寂

電話を終えたらしい由香が、達也のほうに歩み寄ってきた。

「もうすぐ来るって。その間、時間稼ぎしといて」

そう囁いて、由香は急いで校門に向かって走る。

「先輩……私の計画をどうにかしようなんて考えないで下さいね」
微笑しながら、海藤成実達は達也に告げた。

そんなこと、はつきり言って無理だ。誰もそんなこと望んではない。目の前にいる少女以外は。

「じゃあ、なんでそんな無謀な計画立てるんだよ」

なんだかイライラして、思わず怒鳴りそうになる。しかし、ここで怒鳴っても何の意味も価値もない、ただの馬鹿の発言になるので、どうにかして抑えた。

「うん、それを説明するのはまだ早いみたいですけどね。それに、長話だからあまり時間取りたくもないし……」

もったいぶりながら、海藤成実がくすくす笑って言う。

それでも、諦めたくはない。何年後になろうと、海藤成実をどうにかして……殺さないと、この学校も、達也も、由香も、そして海藤成実自身もどうなるかわからない。

危険ゆえに、自分の命の危機までさらしているというのに、海藤成実は全くおびえる気配がない。気づいていないのだろうか？

「自分の命が、大切じゃないのか？ いらないのか？」

彼女の手の包帯が全てを物語っていた。自分の命なんかいららない。削ったっていい。ただ……独りにしないで。

怖いから。傍にいて。誰でもいいから。

死んでもいい。むしろ、死にたかった。今でも死にたいけれど、死ねない。

死ねないものの鎮魂歌

その象徴、海藤成実。

第十三話 『守護者』の静寂

達也も海藤成実も、何も言わなかった。

そこにはただ、息苦しいような張り詰めた空気があつて、何も言う事など出来ない。

彼女は全て知っていて、その上で校長たちを蘇らせ、生き返らせようとしている。そして、自分の父母を取り戻そうと……

「遠藤っ」

気が付くと、由香が達也をかばうようにして前にいた。

「進藤？ どうして……」

由香は、海藤成実を見据えて、小さく囁く。周りで、なんとなく人の気配がした。きつと、『守護者』が到着したのだろう。

「今は何も……言っちゃだめ。海藤成実を……かわいそうだと同情したりしちゃだめ。とにかく、今は黙って……」

小さな声は、途切れ途切れにぼんやりと聞こえた。由香の来ている制服の裾から、だらんと無防備に傷だらけの腕が出ていた。

「おまえ、腕どうしたんだ？」

海藤成実は微笑しながら、達也と由香を交互に見つめている。目の前の光景を楽しむかのようで、由香の表情とは対照的だった。由香は達也の問いには答えず、ただ、海藤成実をにらみつけている。

3人の間にはただ、沈黙の時間が流れていた。誰も何も言わず、それぞれの思いにふけていた。

その時、風が吹いた。

世界の全てが吹き飛ばされそうな突風。肌を感じる鈍い痛み。

「なっ……」

目を開けることができない。

「遠藤っ」

由香が達也を呼んだ。透き通った声。

そして、目を開けた瞬間 ……誰も、いなかった。

第十四話 再び・『守護者』の静寂

周りには誰もいなくて、達也は立ちつくす。

「どういう……ことだ？」

さつきまで傍にいた由香も、海藤成実も、あの中身の抜けたような校長達も、全て消えていた。元から何もなかったかのように。

その部屋には、かすかに匂いが残っていた。覚えのある匂い……由香の匂いだ。

「進藤？」

人の気配がしたので、達也は思わず周りを見渡す。

「遠藤達也……と言ったか。我ら『守護者』はここにいる。ただ、進藤だけ連れて行かれた」

老人のようなしゃがれた声が聞こえた。達也は『守護者』の声に耳をすませた。

「あ、おまえには我ら『守護者』の姿は見えぬ。あの娘はまだ人間としてうまくやれているがな。……この期に、話をしておくか」

『守護者』の気配が徐々に近づいてくるのがなんとなくわかった。何もない部屋には、達也とその『守護者』しかないようだ。

「昔な、この学校には妖怪が住みついたらしい。そこで、お祓いに来た若者が妖怪と『契約』を交わした。一旦それで事態は収まったかのように見えたが、実はそうではなかったみたいだ。その若者は事態をさらに重くしていただけだった」

達也にはその話はちんぷんかんぷんだったが、『守護者』は構わず話を続ける。

「その若者は、簡単で、かつ自分の身を守るために妖怪にこの土地を売った。つまりは、人間に見つからぬように潜んでおけと言ったのだ。妖怪はもちろんそれを実行し、しばらく潜んでおった」

「それで、その妖怪はその後どうしたんですか？」

話がやっと見えてきたので、達也は『守護者』に恐る恐る聞く。
すると、なんてことないように『守護者』は言った。

「この土地……実はな、今もおるのよ。その妖怪の生き残りがない」

第十五話 部屋での静寂

「今も!？」

いきなりそんなことを言われても、あまり信用できなかったが、今もいるのなら……

「進藤は、もしかして妖怪に？」

すると、さも不愉快というように『守護者』は声を低くした。

「先走るな。まだそうとは言っておらぬ。この話はただ単に『守護者』の発端について述べておるのだ。あの娘とは何の関わりもないどちらかというと『死ねないもの』のあの女のほうに関係がある。どちらにせよ、今聞いておくべき話なのだ。さえぎったりするな。時間の浪費だ」

「はい……」

外の様子はわからないが、もう夜中……下手をすれば夜明けになるうという時刻のはずなのに、全く眠気は襲ってこない。それどころか、脳が活発になっていくような感覚さえ起きる。

『守護者』の姿は全く見えないが、気配はまだ感じた。

「その妖怪をしずめるため、多くの術者が駆けつけた。とにかく全力をあげて妖怪退治に踏み切ったのだ。しかし、もう妖怪を止める事は叶わなかった。……まあ、そして術者の多くは今も死霊としてここにいるがな……つまり、それが『守護者』の実体だ」

そして、達也が何か言おうと口を開くと、その瞬間いきなり気配が増えた。増殖するかのように、大量の気配が……辺りを支配する。「ほらな、集まってきおった。皆の者、今は戦う時ではない。あの死にぞこないの少女から進藤を奪還せねばなるまい」

ざわざわと気配が少なくなってくる。それに合わせるように、部屋が壊れた。壁がガラガラと崩れていく。

「んなっ……」

さっきの風と大差ない、まるで押さえつけられるような突風が達也に襲い掛かってきた。外の世界が……乙葉の血だらけの死体が、うつすらと見えて吐きそうになる。

そのまま風に乗せられて、達也は意識を失った。

そして、目が覚めると、そこには自分の部屋だった。

「え、あれ？」

きよろきよろと辺りを見回しても、昨日とあまり変わらない光景が広がっている。

でも、夢ではない。

由香を取り戻さなければいけない。そして、この手で海藤成実を殺さなければいけない。

達也は小さく、息をついた。

エピローグ 空間の静寂

静かな、何もない空間。

そこに由香はいた。

「一体、どういうこと？ どうして私をここに連れてきたの？」

イライラしながら質問をぶつける。海藤成実は、くすくす笑って由香を見る。

「遠藤先輩に、頼みがあるから」

静かな空間に、その声は大きく響く。由香の手に思わず鳥肌が立った。

「先輩には、まだまだ、頑張ってもらわないとね。それと、『死者』の人たちにも……」

意味深な笑みを浮かべて、海藤成実は由香に囁く。

「あんたは……一体、何者？」

感情を押し殺して由香が聞くと、海藤成実は曖昧に微笑む。

夜が明ける。

しかし、世界は狂い始めていた……

「さあ。そんなの誰にもわからない」

ざわざわと音が聞こえる。周りには何もないのに。

死ねないものへの鎮魂歌。それは、音もなく響く。全ての末路を物語る。

そんな不気味な音を聞きながら、海藤成実は手を高くあげる。まだ包帯が取れていないところを見ると、あまり軽傷ではないようだ。

「全ての死者に、誇りと尊厳を」

その手にゆらゆらと白い筋が集まってくる。

由香はそれをみて直感した。『死者』達だ。集まってきたいる…

…どうして？

「この死者達は、私が、取り戻すからね……」

海藤成実は、小さく笑った。

そして、由香の前に炎が燃え上がる。白く、そして穏やかに燃え続ける。

「どうして、そんなことを？」

歪む視界に戸惑う由香に、海藤成実の透き通った声が、優しく告げた。

「さよならの合図と、宣戦布告、かな」

エピソード 空間の静寂（後書き）

第一部、楽しんでいただけたでしょうか？

第二部も投稿中なので、読んでいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9213a/>

言葉にまぎれたうやむや世界。

2010年10月8日15時29分発行